

第382号 (令和2年9月14日(月)発行)

発行所

京都女子大学 宗教部

京都市東山区今熊野北日吉町35  
電話 075 (531) 7074

# 華利陀茶

三昧力をもつて身本処を動ぜずして、よくあまねく十方に至りて、諸仏を供養し、衆生を教化す。

(曇鸞)『往生論註』



## 私の物差し

仏教学非常勤講師 塚本 一真

### 変化のなかで

戸惑いと手探り。私たちの日常は、この数ヶ月で、大きく変わりました。変化を受け入れざるをえない日々は、何とも落ち着きどころがないもので

### まさかの熱中症

今年も猛烈な暑さでした。この時期における熱中症の注意喚起は、今や世間の常識とってよいでしょう。

三年前の夏。体に異常を感じたのは、指先の痺れが震えとなり、キーボードを打てなくなった時です。まだ、午前中でした。激しい目眩に襲われ、病院にいった時には、すでに体がいうことをききません。受付で座り込んでしまった私は、車いすに乗せられ、ベッドに運ばれました。呼吸の乱れと言葉にならない息苦しき。痺れは頬に達し、ついに口がきけなくなり

「先生、違うと思います」と言ってしまう。なぜなら、そんなはずはない、私の体は、自分が一番わかっている、大きな病気に違いないんだ、と思っていたからです。そんな私に、先生は笑顔で言いました。「みんな、そう言うんですよ」

まさか、自分がそうなるとは、微塵も思っていまませんでした。自分の体を知っているつもりで私だったのです。また、当時もテレビやラジオで繰り返して注意喚起していたにもかかわらず、私は「若い自分には関係のないことだ」と高をくくっていました。ここに、私たちの奥底に潜む深い問題があるように思えます。それは、私のことは自分が一番よく知っているのだから、他者の言葉に耳を傾ける必要はない、という姿勢です。また、「正しいのは私だ」という思い、言い換えることもできるでしょう。不安な時、必死

な時、余裕のない時、私に潜むその思いは、首をもたげて表に顔を出し、そして、思いは言葉となり、言葉は鋭い刃となって思わぬ方に向かうのです。先生の「熱中症ですよ」という診断に対して、私が思わず口にした「違うと思います」は、まさに、自分の物差しこそが正しく、自分だけが知っているとの思いが表れたものでしょう。

「正しいのは私だ」という思い、と言

このようなことは、私たちの日常の様々な場面にあるのではないのでしょうか。他者のはたらきを排除し、私の物差しを絶対とする姿勢は、周りの見えない闇へ自身を落ち沈ませるようなものです。仏教では、このよ

無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず

このような視点から考える時、実は私たちのいう「物差し」とは、国や文化、時代や人によって異なり、実に曖昧でたよりないものであることが知られるのです。

もちろん、生活する上において、一定の規則や基準は、社会の秩序を保つために重要です。しかし、社会の根本にある私一人の胸の内に、光が当てられることが軽視され

私を、誤魔化すことなく、蔑むことなく、救いとなる阿弥陀仏の教えです。そこに、ありのままの私が歩むことのできる道がある

「現代と仏教A」の最終講義で、それまでに紹介した親鸞聖人の言葉を参考に、現代の諸問題の中から一つ選り論じるよう指示した。どの受講生の回答もよく考えたもので、読んでいて感心するものばかりであった。ある学生は若者の自殺を取り上げた。「歎異抄」第一三條の「さるべき業縁のまほさば、いかなるふるまひもすべし」という言葉を振り所に論じていた。その一部を紹介しよう。「私は偶然死ななかつたけれど、ほんの少し、僅かな何か一つでも違えば、ニュースで報道される彼らのように、自殺を遂げていたのかもしれない。人間はほんの僅かの違いで、しかるべき縁で死を選ぶ。そのように脆い存在である私たちに、偶然にも死を選んでしまった彼らに、簡単に「死ななくてもよかった」という言葉は投げかけられないのではないだろうか。」

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

前期はコロナ禍のため、対面授業ができずオンライン授業となった。慣れない授業形態に講義をする側も、また受ける側も戸惑ったことだろう。私はLMSを使った講義であったが、回答を読むと、どの受講生も真摯に取り組んでいることに気づいた。「現代と仏教A」の最終講義で、それまでに紹介した親鸞聖人の言葉を参考に、現代の諸問題の中から一つ選り論じるよう指示した。どの受講生の回答もよく考えたもので、読んでいて感心するものばかりであった。ある学生は若者の自殺を取り上げた。「歎異抄」第一三條の「さるべき業縁のまほさば、いかなるふるまひもすべし」という言葉を振り所に論じていた。その一部を紹介しよう。「私は偶然死ななかつたけれど、ほんの少し、僅かな何か一つでも違えば、ニュースで報道される彼らのように、自殺を遂げていたのかもしれない。人間はほんの僅かの違いで、しかるべき縁で死を選ぶ。そのように脆い存在である私たちに、偶然にも死を選んでしまった彼らに、簡単に「死ななくてもよかった」という言葉は投げかけられないのではないだろうか。」

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

「先生、違ふと思ひます」と言つてしまひます。な

